

# 「真のOne Hitachi」への 変革をAIで駆動する デジタルエンジニアリング

— GlobalLogic シャンカールCEOが語る協創の未来 —



## GlobalLogic Inc.社長兼CEO スリニ・シャンカール

デジタルをコアにした「真のOne Hitachi」の実現をめざす日立グループにおいて、デジタルエンジニアリングの中核的存在として位置づけられるGlobalLogic。データ・デザイン・エンジニアリングの力で社会に知的インパクトをもたらし、さまざまな企業のDXとビジネスの拡大を成功に導いている

同社の強みと日立グループの一員としてのビジョンについて、2025年2月に社長兼CEOに就任したスリニヴァス(スリニ)・シャンカール氏にインタビュー。「優れた自主技術・製品の開発を通じて社会に貢献する」という日立グループの企業理念のもと、両社はシナジーにより次々とデジタルイノベーションとグローバル変革の先進事例を生み出している。「真のOne Hitachi」をめざし、デジタルで世界の変革をリードする新しい協創のかたちがここにある。

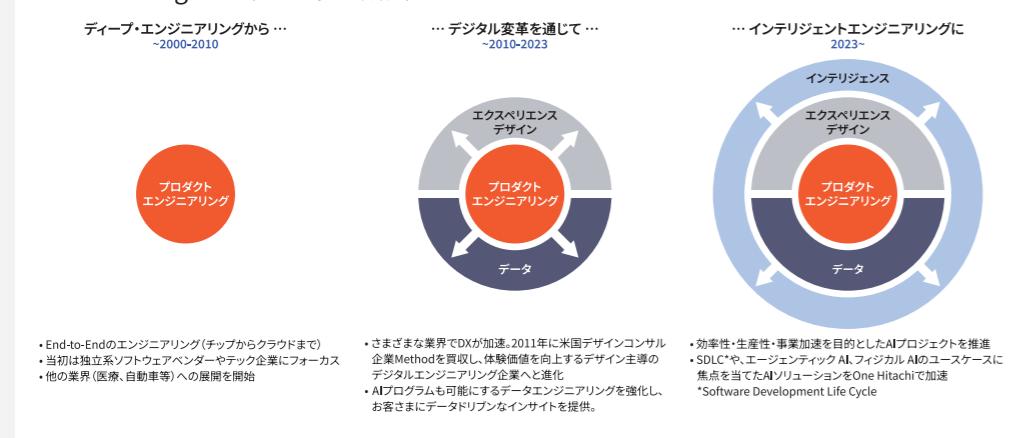
## 協創型 エンジニアリングの原点

GlobalLogicは2000年に米国ハコハバード船に買収された。

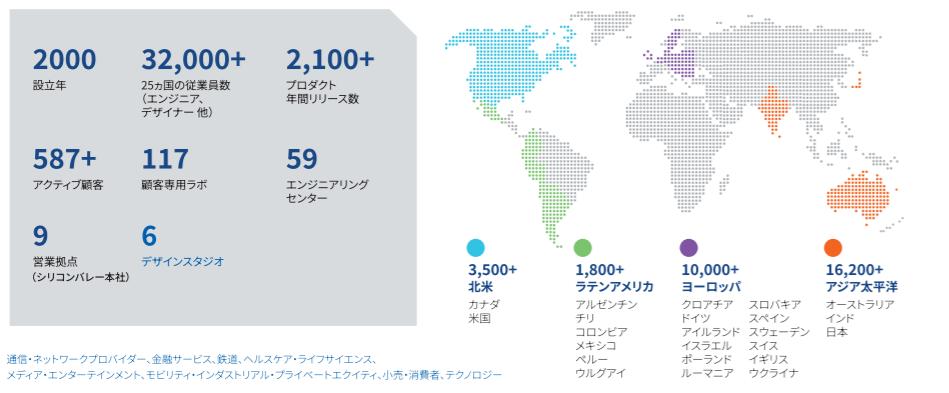
ウェアベンダーの製品開発を手がけていましたが、当初から私たちが意識しているのは、単に開発を請け負う存在ではなく、お客様と一緒に協力して製品とその価値を創造するパートナーであるということでした。

その思想は、のちに「ボモデル」へと発展します。これは、お客さま企業の中に専用チームを設置し、「ゼロディスタンス（お客さまとの距離ゼロ）」のアプローチで長期的にお客さまと価値を「協創」するというスキームです。当社のエンジニアたちはお客さまの開発組織の一部として機能し、お客さまの戦略や企業文化を深く理解した上

GlobalLogic 25年の進化と成長



## シリコンバレーの創造性をグローバルに展開



## 日立グループとの ケイパビリティ融合

員を対象にA－トレーニングを実施し、組織全体でのA－活用を積極的に推進しているほか、2000人のA－データエンジニアとエキスパートを含む、16000人のA－人財を擁し、500件以上の製品エンジニアリング実績を誇っています。業界をリードする専門知識と能力は、ISGプロバイダーから生成A－サービスのリーダーとして2024年に認定されるなど、世界的に高い評価を得ています。

2021年、私たちは自立グループの一員となりました。当時、GlobalLogicの社名は日本では

## スリニ・シャンカール(Srini Shankar)



GlobalLogic 社長兼CEO。2023年にGlobalLogic入社、最高事業責任者およびグローバルインダストリー部門の責任者として、業界別事業部門におけるGo-to-Market戦略の加速を主導。2025年2月より現職。約30年にわたるデジタルビジネスとリーダーシップの経験を生かし、企業ビジョンの策定から事業戦略の実行、グローバル組織の運営まで、全体を統括するリーダーとして同社の成長と変革を牽引している。

Birla Institute of Technologyで工学の学士号を、Indian Institute of Managementで経営学修士号(MBA)を取得。GlobalLogic入社以前はCognizantおよびInfosysにて複数の重要なリーダー職を歴任し、市場の拡大と持続的な成長に貢献してきた。現在は家族とともにニュージャージーに在住。オフにはテニスや歴史書、旅行を楽しむ。

ほとんど知られていないかったため、日立がこの買収に巨額の投資を行ったことは大きな話題となりました。ただ注目していただきたいのは金銭的なことではなく、このM&Aが日立の社会イノベーションを次の段階に進めるためのイパビリティの融合を意味していたということです。

日立は110年以上の歴史を持ち、エネルギー、モビリティ、社会インフラ、産業などの領域で蓄積してきたOT(Operational Technology)とプロダクト、そしてデータの3つの強みを活用したLumada事業をグローバルに展開しています。Lumada事業は、最新のデジタル技術によりお客さまのデータから価値を創出し、ユーハクスペリエンスの設計から製品やサービスの開発・改善に至るビジネス創出プロセスやデジタルノベーションをEnd-to-Endで支援する協創スキームを特長としています。GlobalLogicの協創アプローチもまた、お客様のデジタルジャーニーをEnd-to-Endで支援する点を特長とします。トザ

加速するものです。

私がGlobalLogicに入社したのは2023年のことですが、私たちと日立、それぞれのこれまでの歩みと、こうした融合の意味にとても魅力を感じました。そして2025年2月に社長兼CEOに就任したときには、革新的で創造的なGlobalLogicを率いることを誇りに思うと同時に、日立グループの一員として、社会や地球環境に大きな影響をもたらすデジタル製品・サービスの「デザインやエンジニアリングを通じてお客様の変革を支援し、日立が注力する社会イノベーションの実現に取り組めることに大きな高揚感を覚えました。

はデータ、デザイン、エンジニアリングを駆使しながら最先端テクノロジーを活用する「デジタルエンジニアリング」により、社会に知的インパクトをもたらし、お客さまのデジタルトランスフォーメーション(DX)とビジネスの拡大を成功に導くという姿勢を表しています。

この「デジタルエンジニアリング」は、次の3つの要素から成り立つでしょう。一つ目は「Designed for Desirability(人を惹きつけねばなりません)」——技術起点ではなく、人々が「使いたい」と感じる体験を起点としたエクスペリエンスデザインの追求です。私たちの戦略デザイン部門であるMethodが、エクスペリエンスデザインやサービスデザインを融合することで、製品の機能性だけでなく、社会的背景や感情的満足をふまえた総合的な体験価値を「デザインするとともに、お客様のビジネスの将来像を可視化します。

## Engineering Impact——社会に知的インパクトをもたらすデジタルエンジニアリング

ここで、もう少し私たちの強みについて紹介しておきましょう。

GlobalLogicが掲げる「Engineering Impact」は企業メッセージ

として、データから価値を創出し、ユーハクスペリエンスの設計から製品やサービスの開発・改善に至るビジネス創出プロセスやデジタルノベーションをEnd-to-Endで支援する協創スキームを特長としています。GlobalLogicの協創アプローチもまた、お客様のデジタルジャーニーをEnd-to-Endで支援する点を特長とします。トザ

として、データから価値を創出し、ユーハクスペリエンスの設計から製品やサービスの開発・改善に至るビジネス創出プロセスやデジタルノベーションをEnd-to-Endで支援する協創スキームを特長としています。GlobalLogicの協創アプローチもまた、お客様のデジタルジャーニーをEnd-to-Endで支援する点を特長とします。トザ

## 日立とGlobalLogic協創アプローチの符合

つまり、GlobalLogicのアプローチはLumadaの協創アプローチと合致し、補完するものだと言えます。日立とGlobalLogicの融合は、これまで日立がLumadaを通じて蓄積してきたデジタルソリューションのグローバル展開を加速し、お客さまや社会が直面する

問題を解決をめざす社会イノベーション事業の強化につながっています。さらに、日立がめざす「真のエンジニア、Aーを活用したデータ分析によりインサイトを獲得するデータサイエンティストなどのプロフェッショナル人財が「ラボ」としてチームを組み、グローバル規模での協創を通じてお客さまのデジタルイノベーションを加速、新たなデジタル製品やユーハクスペリエンスの開発を支援しています。

## アイデアをデジタル価値へつなげるGlobalLogic Velocity AI

GlobalLogicがめざすのは、Aー



なくAーが人間の創造性を拡張する社会、デジタルと人間の創造性が共進化する社会です。Aーは目的ではなく、社会をより賢く、より持続可能にする手段であると私は考えています。

しかし、多くの企業ではAーを

課題の解決をめざす社会イノベーション事業の強化につながっています。

「One Hitachi」——エナジー、モビリティ、コネクティビティ、インダストリーズ、デジタルシステム&サービスの4セクターで展開する日立グループの各事業を、デジタルを

コアに強く連携させ、日立ならではの価値を創出する——その実現を

効率的に導入し、安全に使いこなすことに苦戦しています。そこで

私たちは企業のAI生導による製品開発と業務効率化、迅速な意思決定を支援するため、AI「デジタル技術と専門家の知識を包括的に活用するサービス」ソファーリングスイート「Velocity AI」を開発、2025年3月にローンチしました。

Velocity AIは、既存のAIモードやクラウドサービスを束ね、セキュリティや法的リスクを管理しながらAI活用を促進する「Platform of Platforms」として、プラットフォームトーキットチャーニ基づいて構築されていました。ソリューション開発のライフサイクル全体にわたってAIを活用する「AI-powered SDLC(Software Development Life Cycle)」と業務効率と創造性の向上をめざした企業のAI活用・導入を支援する「AI-powered Enterprise」と、この2つの仕組みをベースで構成され、AIを安全に使いたい、製品やサービス、オペレーション全体で持続的な価値を生み出す仕

組みを提供します。

私たちが行つたこれまでの検証では、Velocity AIを導入したクライアント企業では、組織全体の生産性が30%向上、製品・サービスの開発期間25%短縮、運用コスト20%削減といった成果が得られています。Velocity AIは、現在、日立のソフトウェア開発ならびくの活用が進んでいます。

また、日立グループはケイパビリティ強化、ファットプリント拡大をめざしてAI関連企業のM&Aも推進しています。直近では2025年9月、ドイツに本社を置くAICONハサルトイエングファームのsynvertを買収し、GlobalLogicの100%子会社としてM&Aを決定しました。日本のM&Aは、エーデルハイツクA（現実の物理世界と直接的に相互作用しながら自律的に行動するAI）の開発を加速し、それらを活用してお客様や社会の課題解決をめざす日立のソリューション群「HMAX」の展開強化を目的としています。

## One Hitachiによる デジタルトランスフォーメーション

ノウモド述べてきたようなGlobalLogicのケイパビリティは、「真のOne Hitachi」によるDXを推進する触媒としての力を發揮しています。例えば、田立ホールが、2025年9月に米国メリーランド州ベイガーツタウンに開設した新工場において、製造プロセスの効率化、作業効率と作業員の安全性のやいなる向上など、次世代スマートマニファクチャリングの実現に向けたグループ一体の共同

プロジェクトが進んでおり、その中でGlobalLogicは重要な役割を担っています。

また、田立ナガーネ設備メンテナンスの高度化などエネルギーソリューションの変革に向けた取り組みを進めながら、田立ハイテクやFlexware Innovation（本社：アメリカ）、田立アクアテック（本社：シンガポール）をはじめとしたコネクティビティストリーズセクターの各社と、製造プロセスのDX化や、ユーザー体験を向上するアプリケーションへの高度化などもやまな取り組みを進めています。

多くの協創事例を手掛けており、その直近の例として、日本国内のOne Hitachi事例をご紹介します。

## BuiMirai— ビルの価値を高める 統合AI・デジタルサービス

田立ビルシステムが提供する「BuiMirai」は、ビル管理の効率化や業務品質の向上、利用者の快適性向上などを実現するLumadaのデジタルサービスです。GlobalLogicが開発に参加し、規模の拡大・縮小などにも柔軟に対応でき「as a Service」の「HMAX for Buildings: BuiMirai」と発展させました。「as a Service」の「HMAX for Buildings: BuiMirai」と発展させました。2025年10月から提供を開始しており、今後、順次サービスを拡充していく計画です。

GlobalLogicがクラウドの設計とコメイトサインを主導したこのサービスでは、昇降機をはじめとするビルのさまざまな機器の運用データ、ビルを利用する人々の

